
オレと愛子と召喚獣

れおん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレと愛子と召喚獣

【Nコード】

N8052S

【作者名】

れおん

【あらすじ】

バカとテストと召喚獣のオリ主ものです。

主人公「和泉 レオ」と「工藤 愛子」の話です。

工藤愛子がオリ主とは嫌もしくはそのような話は認めないという人は戻ってくれてもかまいません。

作者が二次小説にはまって書こうとした自己満足ですが感想もしくはコメントお願いします。

作者の初投稿作品なのでキャラ崩壊・原作崩壊する可能性もありますが読んでいただけると幸いです。

原作崩壊はあくまで可能性なのでしないかもしれません。

プロローグ（前書き）

初投稿作品なので感想・コメントはお手柔らかにお願いします。

プロローグ

SIDEレオ

桜舞う4月俺（和泉レオ）は二度目の春を迎えた。

隣で歩いているのは現在交際3カ月と少しの工藤愛子だ。

愛「ねえレオ君」

レ「どうした？愛子」

愛「レオ君は振り分け試験どうだった？」

俺たちの通う文月学園には進級する時に振り分け試験と言うものを受けてその成績で設備の違うクラスに振り分けられるという変わった学校だ。

レ「Aクラスは固いな」

愛「一緒のクラスがいいね♪」

クラスは学力順にA～Fに分けられている。俺も愛子もAクラスには十分に届くほどの成績がある

レ「そうだな」

愛子と話しているうちに校門までついたようだ。何やら校門前でまだ肌寒い時期というのに半袖の趣味はトライアスロンという生徒指導の西村先生（生徒からは鉄人と呼ばれている）が立っていた。

？「お前たちは相変わらず仲がいいな」

レ・愛「おはよう（ございます）鉄っちゃん（西村先生）」

鉄「おはよう・・・おい和泉いま俺のことを鉄っちゃんとよばなかったか？」

レ「呼びましたけど・・・それがなにか？」

俺は鉄っちゃんこと西村先生には少しばかり気に入られているらしい。聞いた話によると俺は今の若者には珍しく陰口などを言わず正々堂々と言ってくるからだそうだ。

鉄「はあ・・・まあいい。これをうけとれ。」

そう言って鉄っちゃんは俺と愛子に封筒をわたしてきた。

レ「これなんだ？」

愛「レオ君これは振り分け試験の結果を書いた紙だよ。」

鉄「その通りだ。」

レ「愛子はどのクラスだった？」

愛「僕はAクラスだよ♪」

どうやら愛子は無事にAクラスに行けたようだ。俺は学年主席になったこともあるくらいだから楽勝♪・・・のはずだった

鉄「和泉、俺はお前が工藤と付き合い始めてからもしかしたらこいつは工藤が近くにいないとただのドジなんじゃないかと思っていたんだ。」

レ「そんな失礼な。まるで俺が愛子に甘えきってるみたいじゃないか。・・・確かに甘えてはいるけど俺はドジではないはずだ。」

鉄「その疑問は結果を見てなくなった。やはりお前は工藤が近くにいないとただのドジだ。解答用紙の名前を書き忘れるくらいのなら！

！学年でお前だけだぞ名前書き忘れで0点は」

和泉レオ：Fクラス

レ「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺はしばらく放心状態になっていた

プロローグ（後書き）

感想・コメントお待ちしております

第一問

SIDEレオ

レ「すまなかったなあ愛子」

愛「気にしないでレオ君、だってレオ君は僕に甘えてるんだもん♪」

レ「付き合い始めたころは愛子のほうが甘えてたじゃないか。毎日手を繋ごうとかおんぶしてとかさあゝ。」

愛「そ、そんなことないもん／＼」

そう言って照れている愛子はすごくかわいかった。

レ「なあ愛子」

愛「何？」

レ「抱きしめてもいい？」

愛「えっっ！！ここではちよつと／＼家に帰ってからじゃだめ？」

レ「わかった。家で愛子に甘えさせてもらうよ。じゃおれはとりあえずFクラスにいくな。昼休みにはAクラスに来るから。」

愛「わかった。待ってるね。」二コリとほほ笑む愛子の顔を見ているととても落ち着く。

場所は変わってFクラス前

ん？あれは明久じゃないか。なんでFクラスの前で立ち止まっているんだ？声でもかけてみるか。

レ「おゝい明久」

SIDE明久

Aクラスとのあまりの設備の差に呆然としてっていると誰かが向こうから僕の名前を呼びながら歩いてきた。

明「どうしてレオがここにいるの？」

レ「まあ色々あったんだよ。とりあえず教室入ろうぜ。」

明「遅れました」

レ「邪魔するぞ」

雄「はやく座れうじ虫野郎…ってなんでレオがここにいるんだよ！」

明「なんで雄二が教壇に立っているのさあ？」

雄「それは俺がこのクラスの代表だからだよ。」

レ「それより雄二、俺に向かってうじ虫野郎とはいいい度胸じゃないか。」

雄「ま、まて俺は明久に言っただよ」

悪鬼羅刹と呼ばれたあの雄二がびくびくしている！

そんなにレオは怖いのかなあ？

SIDEレオ

レ「まあ今日のところは許してやろう。」

？「すみません。少しどいてもらえますか？」

うしろから覇気のない声が聞こえてきた。今にもリストラされそうなサラリーマンみたいなオーラが漂っている。

？「えー、おはようございます。2年F組担任の福原慎です。よろしくおねがいします。」

福原先生は薄汚れた黒板に名前を書こうとして、やめた。

レ「・・・チョークすら、まともにないんすか？」

福「あとで申請しておきますので授業には間に合う筈です。」

レ「これがFクラスか・・・。」福「そのとうりです。」

福「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されてますか？不備があれば申し出てください。」

F「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないですー」

福「あー、はい。我慢してください」

F「先生、俺の卓袱台の脚が折れてます。」

福「木工ボンドが支給されてますので、後で自分で直してください」

F「センセ、窓が割れていて寒いんですけど」

福「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう。」

福「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね、廊下側の人からお願いします。」

？「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。」

秀「————と、いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

？「・・・・・・土屋康太」

？「——です。海外育ちで、日本語は会話は出来るけど読み書きは苦手です。」

島「趣味は吉井明久を殴ることです☆」

島「はろはろー」

明久が怯えている

明「・・・あう。し、島田さん」

島「吉井、今年もよろしくね」

F「——です。よろしくお願いします。」

次は明久の番か

明「えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね♪」

『『『『ダアアーリーーン!!』』』』』

野太い声の大合唱。

明「——失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願い致します。」

次は俺だな

レ「俺は和泉レオだ。趣味は特にない。以上」
短すぎたか…

ガラリと教室のドアが開き、息をきらせて胸にてを当てている女子生徒が現れた。

「あの、遅れて、すいま、せん・・・」
『え?』

担任の福原さんがその姿をみて話しかけた。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもおねがいします」

「は、はい！あの、姫路瑞希ひめじみずきといいます。よろしくお願いします・・・」

そこには、元学年次席の姫路がいた。

F「質問です。」

姫「あ、は、はいっ。なんですか？」

F「どうしてここにいますか？」

クラス全員の疑問のはずだ

姫「振り分け試験の時に高熱を出してしまって…途中退席したんです。」

なるほどそういうことだったのか

F「そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに。」

F「ああ。科学だろ？アレは難しかったな」

F「前の晩彼女が寝かせてくれなくて。」

F「今年一番の大嘘をありがとう。」

…ほんとにバカばかりだな

雄二と真剣な顔をした明久が教室から出て行った。

どうやら真剣な話のようだ…

しばらくして先生が戻って来て自己紹介が再開された。

福「では最後にクラス代表の坂本君自己紹介お願いします。」

雄「Fクラス代表の坂本雄二だ。――。さて、皆に1つ聞きたい。

Fクラスの設備に不満はないか？」

「「大ありじゃあっ！！」」

雄「そこでこれは代表としての提案なんだがFクラスはAクラスに試験召喚戦争を仕掛けようと思う。」

こうしてFクラス代表坂本雄二は戦争の引き金を引いた

第二問（前書き）

お気に入り登録してくださった方々本当にありがとうございます。
今後もしやう言うのを励みにして頑張っていききたいと思ひます。

文才がほしい

第二問

レオSIDE

Aクラスへの宣戦布告

それはFクラスにとつてあまりにも無茶な提案だった。

F「勝てるわけがない。」

F「これ以上設備を落とされるのは嫌だ。」

F「姫路さんがいたら何もいらない。」

そんな悲鳴が教室のいたるところから上がってきた：だれだ今姫路にラブコール送ったの！！

最後の奴は知らんが：Fクラスの奴らが言いたいことも分かる。
AとFの戦力差は明らかだ。

雄「そんなことはない。必ず俺が勝たせて見せる。」

F「何を馬鹿なことを。」

F「出来るわけないだろ。」

F「何の根拠があつてそんな事を。」

否定的な言葉が今日室内を飛び交う

全く同感だ。正面から挑んでAクラスに勝てるとは思えない。

雄「根拠ならある。それを今から説明してやる。」

不敵な笑みを浮かべ壇上から俺たちを見下ろす親友（明久関係で）

雄「おい康太。畳に顔付けて姫路のスカートのぞいてないで前に来い。」

康「……………！！（ブンブン）」

雄「土屋康太、こいつがあ有名なムッツリーニだ。」

康「……………！！（ブンブン）」

土屋康太という名前はそこまで有名ではないがムッツリーニという名前は男子には畏怖と畏敬を女子には軽蔑を持ってあげられる。

F「ムッツリーニだと。」

F「馬鹿な奴がそうだというのか？」

F「だが見ただろ？あの恥も外聞も捨てたのぞきを」

F「ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ」

……やはり康太の二つ名はみんな知っているようだ

雄「姫路の事は説明するまでもないだろう。」

姫「えっ、わ、私ですか？」

雄「そうだ。ウチの主戦力だ。期待しているぞ。」

雄二に名前を呼ばれておどおどしているが彼女は間違いなくAクラスでもトップクラスだ。

F「そうだ。おれたちには姫路段がいるんだ。」

F「彼女ならAクラスにも引けを取らない」

雄「それに木下秀吉だっている。」

木下秀吉。学力はFクラスだが演劇部のホープと言われている。

双子の姉の事はあまり知らない。

F「おお、あいつは確か木下優子の」

雄「当然俺も全力を尽くす。」

F「確かになんだかやってくれそうな奴だ。」

F「坂本って小学生の頃神童と呼ばれてたらしいぞ。」

まあ今では元神童だがな。…こいつら雄二の中学時代の悪名忘れてんじゃねえのか？

今Fクラスの士気は最高潮だ

SIDE明久

雄「そして吉井明久だっている。」

さっきまで最高潮だった士気が今ので落ちてしまった。……なるほど僕はオチ扱いか！！

明「ちよつと雄二、なんでぼくの名前を出すのさ。そのせいでさっきまで最高潮だった士気に早くも翳りが見えているよ！！」

F「誰だ吉井明久って。」

F「聞いたこと無いぞ。」

雄「皆知らないか。なら教えてやろう。こいつは《観察処分者》だ。

「F「それって馬鹿の代名詞じゃないのか？」

明「違うよ。ちよっとお茶目な16歳につけられる愛称で……」

雄「そうだバカの代名詞だ。」

明「ちよっと、肯定しないでよバカ雄二」

SIDEレオ

明久が姫路に観察処分者について説明している間に俺は雄二のころへむかった。

レ「雄二、どうやって式を挙げるつもりだ？」

雄「明久を宣戦布告の生贄にする。」

たまに雄二と明久は本当に親友なのかと思うことがある

レ「もしお前の判断でそれでも士気が上がらなそうだったら俺の事を言ってもいいぞ。」

雄「良いのか!？」

レ「ああ…どうせいつかはばれるんだ。それならクラスの士気を上げるために名乗りたい。」

雄「分かった。……皆、こっちを向いてくれ。」

SIDE明久

雄二が再びみんなの視線を集めた。今度は何を言うつもりなんだろう？

雄「さて、明久の事はあえて一旦士気を下げするための前座だ。」

明「どうして士気を下げる必要があったんだよ!!」

雄「落ち着いて話を聞け、このバカ。」そんなのだから近所の小学生にバカなお兄ちゃんとか言われるんだろう？

明「な、なんで知ってるんだよ？」

雄「まさか本当だったのか。少しカマをかけるつもりだったんだけどな」

雄二の策略に僕はすっかりはめられてしまった

明「そんな分けないじゃないか…そんなに悲しい顔で僕を見ないで。」

雄「話がそれてしまったな。出て来てくれ。」

僕は本当にオチだったのか。でも姫路さんよりも強い切り札って誰のことだろう？まさかレオ？でもレオは普通のAクラスレベル出し姫路さんの方が点数ありそうなんだけどなあ。

レ「さっきの自己紹介でも行っただが和泉レオだ。」

F「和泉レオって誰だ？」

明「雄二どうしてレオなの？レオは普通のAクラスレベル：だよ。」

雄「Aクラスレベルって言うだけで十分に切り札だろうがこのバカ。まあこいつはそれだけじゃないぜ。」

そう行つてにやりと笑う雄二

雄「こいつは：和泉レオは皇帝だ」
エンペラー

F・明「なんだと〜！！！」

F「あいつがそうだというのか？」

明「でもレオは噂に聞いていた皇帝の性格とは全然違うよ？」

雄「お前は別の中学だから知らないのかもな。レオ説明してやってくれ。」

そしてレオがもういちど壇上に上がった

レ「今説明された通り俺が皇帝だ。性格の事は俺は細かく言うとうが大まかに言うなら二重人格みたいなもんだ。」

明「でも僕は一度ももう一つの人格を見たことがないよ？」

レ「それは俺が高校に入った頃には7割は支配出来ていたからだ。しかし試召戦争が始まるともう一つの性格が出てきてしまうかもしれない。だから注意していてくれ。あと皇帝になった俺には近づくなよ。おれは仲間を巻き込みたくない。」

知らなかった。まさかレオが二重人格だったなんて

姫「あの〜吉井君ちょっと聞いてもいいですか？」

明「どうぞどうぞ」

姫路さんに話かけられたんだか今日はいいことありそう

姫「皇帝って言うのはどういう噂があるんですか？」

明「色々あるよ。たとえば皇帝の本気は学年首席レベルだとか鉄人

と互角だとか、他にも色々あるけどあまり言い噂は無いなあ。一言
でいえば唯我独尊を地で行く感じだね。」

姫「そうなんですか」

F「姫路さんに神童そして皇帝がいるんだっただりもしかしたらAクラスにも勝てるかもしれない。」

雄「皆この境遇は不満だろ？」

F「当然だ。」

雄「ならば全員筆を執れ！出陣の準備だ。」

F「おおー！！」

雄「俺たちに必要なのはシステムデスクだ！」

F「うおおー！！！！」

雄「明久には宣戦布告の使者になってもらいたい。」

と雄二が言った。でも階勢力の宣戦布告の使者ってひどい目に会う
気がする

明「下位勢力の使者ってたいいひどい目に会うよね？」

雄「大丈夫だ。だまされたと思って行ってこい」

明「分かったよ。」

数分後

明「騙されたああ！！」

雄「やはりそう来たか。」

明「分かっていたの？だったら少しは悪びれろよ！！」

雄「そんなことも分からずに代表が務まるかよ！！」

時は変わって昼休み

雄「飯は屋上で食べようぜ。」

明「そうしよう。」

みんなで屋上に行こうとしたら

レ「スマンが俺は約束があるからみんなで行ってくれ。どうせ俺は
Dクラス戦には出ないだろ、代表？」

雄「ああその通りだ。帰ってくるときにFクラスに入るのを見つからないようにしろよ!!」

レ「了解」

SIDEレオ

俺は今Aクラスの前にいる。そして入り口付近に知っている顔を見つけた。

レ「すまんが翔子愛子を読んでもくれないか？」

翔「……ちょっと待ってて。」

愛「やっほーレオ君。待ってたよ。早くご飯食べよ♪」
レ「そうだな。」

昼食後おれは愛子と話していた

愛「Fクラスはどう？」

レ「やっぱり男ばかりで暑苦しいな。」

愛「女の子がたくさんいるクラスが良かったの？」

愛子が頬を膨らませながら言ってきた。やっぱり可愛いな。

レ「もしかして妬いてるのか？」

などと軽い冗談を喋っているとあっという間に楽しい食事の時間は過ぎて行ってしまった

第二問（後書き）

コメント・感想待っています。

指摘なども大歓迎です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8052s/>

オレと愛子と召喚獣

2011年10月9日01時03分発行